

2015年 秋号

笑顔と心をつなぐネットワーク 明社通信

HEARTFUL

はーとふる

連載『これからの明るい社会づくり運動・3つの方針』活動紹介

埼玉県・川口明社

連載 未来を創造する子どもたち

第3回 子どもの貧困と負の連鎖

被災地レポート「わすれない、いつまでも」

第6回 被災地のシングルマザーが子どもと生き抜くために



上) 第37回たら祭り会場風景。 下) 清掃活動をする川口明社スタッフとボランティアの皆さん。

川口市青少年団体連絡協議会事務局長
吉田喜次さん

青年が出会い、交流のできるイベントを創ろうと、1972年から2年間、「川口市青年フェスティバル」を開催しました。これは川口明社所属の青年と私たち青少年相談員との出会いから実現したもので。青少年相談員は、埼玉県知事の委嘱を受け、「地域の子どもたちの相談話し相手や遊び相手となつて、子ど



青少年相談員と祭りを企画

毎年8月の第1土・日曜日に開催される、川口市の「たら祭り」(主催:川口市たら祭り実行委員会)は同市の夏の風物詩。人口58万人の川口市で毎年、約40万人の人出で賑わいます。同祭は「薄れつたる人とひととのふれあいを、市民祭りである『たら祭り』を通してとりもどすこと、及び市民相互の連帯感を育み、心のふれあう住みよい川口を築くため」に開催されていますが、この祭りの創設は川口明社と青少年相談員との出会いに遡ります。

連載 『これからの明るい社会づくり運動・3つの方針』 活動紹介

昨年11月に開催した『全国都道府県会議』では、本運動がこれから目指していく具体的な「3つの方針」が発表されました。

- 1 地域のために活動している諸団体と連携し一緒に活動を行い、身近な問題に取り組む市民運動として展開していく。
- 2 行政等の実施する地域活動や催事に積極的に参加し、行政との信頼関係を築いていく。
- 3 地域に合ったさまざまな活動をきっかけに、地域社会に貢献したいという願いをもった個人・団体へ積極的に呼びかけ、善意の実践の場を提供していく。

諸団体に呼びかけ、40年以上も前から市民が交流する祭りをプロデュースする地区明社があります。荒川を隔てて東京都に隣接する埼玉県の川口明るい社会づくりの会(小嶋隆善会長／以下、川口明社)です。8月1、2の両日、川口オートレース場で開催された『第37回たら祭り』で活躍する川口明社を紹介します。

※05は前回からの通し番号です。

もたちの健やかな成長を助けるために活動する青年ボランティア』です。

2回目の同フェスティバルの閉会式で、のちに川口市長になる永瀬洋治さんに「もっと大勢の青年が集まるイベントにならないか」と発破をかけられ、「よし！やつてやろうじゃないか！」と、鋳物・機械ほか地場産業の組合の若手や市内全域の大小さまざまな団体に呼びかけ、実行委員会形式の『キュー・ポラ祭り』を開催しました。

開催資金を集めるために、バザーを開いたり、寄付集めに企業を訪問したり、いろんなことをやりました。実行委員はいつも30人くらい集まり、機動力があるため、おのずから祭りの中核を担った明社の方々とはとても仲良くなりましたね。

やがて、急激に規模が拡大したため、川口市も参画する形で、現在の『たたら祭り』に発展したわけです。この実行委員会形式は、今も継承されています。また、全国的な「ふるさと祭り」開設の動きの中で、モデルケースとして近隣他市にも波及しました。

祭りの翌朝6時にはたくさんのボランティアが参加するようになりました。

また、川口市青少年ボランティア育成委員会の仲介で中学生も清掃ボランティアに多数参加し、川口明社がその受け入れを担っています。

毎年3月から月1回の『たたら祭り』プロデューサー会議に出席する川口明社事務局スタッフの澤幡欽司さんは、中学生や地元少年野球チームの子どもたちが訪れるたびに、さわやかな笑顔と温かい言葉をかけ、丁寧に応対します。こうした対応の一つ一つに、「陰役に徹する」という提唱者の精神が生かされていると感じました。

川口明社の顧問で、『たたら祭り』実行委員会会長の奥ノ木信夫市長に川口明社への期待をお聞きしました。



各部門に参加するボランティア

川口明社 これまでの取り組み

1969	明社運動提唱
1971	川口明社創立
1972	『第1回川口市青年フェスティバル』を開催
1973	『第2回川口市青年フェスティバル』を開催
1974	『第1回キュー・ポラ祭り』を開催 ※1978年・第5回まで継続開催。
1979	『第1回たたら祭り』を開催 ※1990年の第12回までメインステージ、子どもチャレンジ広場、献血、クリーン部門を担当。
1991	『第13回たたら祭り』 ※この年から献血とクリーン部門だけを専門に担い、清掃奉仕者の受け入れを行う。
2015	『第37回たたら祭り』

川口市長 奥ノ木信夫さん

川口明社の皆さんには、市民のために、毎年『たたら祭り』をはじめ多くのご奉仕を担っていただき、心から感謝しております。

私も20年前には、会員の一人として、早朝から夜遅くまで、ゴミ拾いをしてきましたので、皆さんのご苦労はとてもよくわかります。人を育み、誰もが活き活きと活躍できる元気なまち・川口をみんなでつくるために、これからも活躍を期待しております。

川口明社会長 小嶋隆善さん

会員の皆さんのがご苦労を担ってくれますので、私は苦労が一切ありません。市民が集い、一番喜ぶお祭りを、陰の力となつて取り組む効果は大きいと思います。会場はいつもきれいで、市外からお越しになられるお客様も、とても感心されています。

川口明社の努力があつて、美しいお祭りになっていますので、大きな貢献をしていると思います。これは歴代の市長も讃嘆してくださっていることです。とても有難いことで、会員の皆さんに感謝している次第です。



8月3日の早朝には、同祭ファイナーレの前夜の花火大会のゴミを拾うため、清掃ボランティアが集合。猛暑の3日間、川口明社が『たたら祭り』に派遣したボランティアは延べ千人超でした。小嶋会長にご苦労と成果をお聞きしました。

清掃ボランティアの受け入れを担う

川口明社事務局長 山内 修さん

当時の川口市は「埼玉都民」と称されたよう

キュー・ポラは、鋳物製造で、銑鉄を溶かすのに用いる円筒形の直立炉。このキュー・ポラが屋根から突き出た姿は鋳物工場のシンボルで、鋳物産業のまち川口市を象徴することから、祭りの名前とされました。

実行委員会の中心になるのではなく、常に裏方を務めることで、それができたのは、「陰役に徹するのが明社運動の姿勢です」と、提唱者の庭野日敬先生に教えられていましたからですね。



大きな市民祭りとして開催された『たたら祭り』でしたが、実行委員会が一番苦惱したのが、ゴミのポイ捨てでした。夜になると、ゴミが散乱

置した回収箱は、出店業者が自店のゴミを出すため、すぐにゴミが溢れて散乱していました。そこで、毎年、実行委員会のプロデューサー会議で「自店のゴミは自店で集積場に運ぶこと」「ゴミとなるものの持ち込みの減量化」を訴え、協力をお願いしました。



今では、露天商の方々はゴミの回収業者を雇い、会場をきれいに使用することに協力してくれています。各コーナーの方々も会場にお越しのお客様も、回を重ねるたびに、ゴミ回収のマナーが向上し、おかげさまで祭り会場はいつもきれいに使用されるようになりました。

川口明社監事 中一浩さん

クリーンコーナーを担当する川口明社の取り組みが始まります。第1回から毎年欠かさず、クリーンコーナーを担当している中一浩さんご苦労話を伺いました。

うに、東京で働く青年がとても多かつたので、「地元にいる青年と一緒に何かできるといよいね」と、2日間のお祭りを企画しました。内容は、ステージにバザー、産直販売、ちびっこ広場、神輿、パレードなどです。その後、川口市に「大きな市民祭りがほしい」というニーズもあり、現在の『たたら祭り』に発展していきました。

「たたら」は、鉄を熔かすときに、風を送る大型の「ふいご」を意味します。ここでも鋳物産業のまちにふさわしい名称となりました。

川口明社は、キュー・ポラ祭りのときから祭り会場の清掃奉仕を行っておりましたので、「たたら祭り」でもクリーンコーナーを担当している中一浩さんご苦労話を伺いました。

当初の開催資金は約7千万円で、川口明社は第12回までメインステージの運営を担い、清掃奉仕も含め、3日間で延べ3千人のボランティアを派遣しました。現在は、協賛団体が多くなりましたので、川口明社としては清掃奉仕と献血を担当しています。

実行委員会の中心になるのではなく、常に裏方を務めることで、それができたのは、「陰役に徹するのが明社運動の姿勢です」と、提唱者の庭野日敬先生に教えられていましたからですね。

当初、会場に設けられた回収箱は、出店業者が自店のゴミを出すため、すぐにゴミが溢れて散乱していました。そこで、毎年、実行委員会のプロデューサー会議で「自店のゴミは自店で集積場に運ぶこと」「ゴミとなるものの持ち込みの減量化」を訴え、協力をお願いしました。

今では、露天商の方々はゴミの回収業者を雇い、会場をきれいに使用することに協力してくれています。各コーナーの方々も会場にお越しのお客様も、回を重ねるたびに、ゴミ回収のマナーが向上し、おかげさまで祭り会場はいつもきれいに使用されるようになりました。